

熊薬同窓会々報

第 38 号

平成 14 年 7 月 15 日
発行

「熊薬の教育・研究の更なる充実・発展を期待して!!」

熊薬同窓会 副会長
田代 昭(昭和42年卒)



熊薬同窓会の副会長、および熊薬研究助成会の運営委員長を担当しております立場から熊薬同窓会会員の皆様にご挨拶申し上げます。会員の皆様もご存知のように熊薬同窓会は「薬学部の教育・研究の発展に寄与する」ことを目的のひとつに掲げています。

文部科学省は、先ごろ国立大学の独立行政法人化についての最終報告書をまとめて公表し、このことについて本年の国会に法案を提出して、平成16年からの独立行政法人化を目指しているとの見解が示されました。これに関しては、平成9年に端を發しここ2,3年程前からこの議論が本格化してきており、21世紀を輝ける時代とするため、国立大学の運営の見直しについて、現在の設置形態では限界があり、教育研究業績に対する評価を基礎に、規制を緩和し、それぞれの機関にふさわしい組織や運営の形態を追究して、適切な評価システムを前提とした制度、すなわち、独立行政法人制度が現実的にクローズアップされてきたという印象を受けています。このような激変・激動の流れの中で、熊本大学におきましても学長をはじめ各学部の先生方が中心となって、21世紀の電腦社会の人間のあり方、熊本大学の教育・研究改革の展望について懸命の努力を払っておられると聞いています。一方、わが国の大学薬学部におきましても、薬学教育は大きな転換期にあるといわれています。医療における薬学教育は、より医療に結びついた医薬品を取り扱う専

門家としての薬剤師を養成するために、今後ますます実務型の教育を取り入れていかなければならないとの認識から、6年制の問題や病院あるいは保険薬局実務実習のあり方などの議論が展開されています。また、21世紀は「ゲノム創薬」の時代といわれ、従来の薬学の領域に加えて新たに細胞遺伝学、分子生物学、免疫学などを基礎として、遺伝子工学やタンパク質工学などのテクノロジーを駆使する教育研究体制を充実・拡大していく必要性が論じられるようになってきています。

このような激動の時代の中で、皆様もご存知のように我が熊薬はここ数年来時代に即した充実・発展を遂げてきています。平成10年度には大学院薬学研究科薬科学専攻に加えて、臨床系医療薬学の専門的知識と技術を兼ね備えた資質の高い薬剤師の育成と先進的な臨床薬学研究的の推進を目指して、全国の国立大学に先駆けて新しく臨床薬学専攻(独立専攻5講座)が設置されました。また、平成13年度には「ゲノム創薬」への目的指向性の高い教育研究体制を敷き、先導的創薬を担う有能な人材を育成することを期して、分子機能薬学専攻(独立専攻7講座)が発足しました。こうして、今や熊薬は全国でもトップクラスの充実・発展を実現し、21世紀の薬学の教育研究の先駆者としての位置付けを築いてこられました。これには現上釜学部長を始めとして歴代学部長および関係の先生方の熱意とたゆみない努力に帰るところ大でありまして、その先見性とご尽力に対し深甚なる敬意を表する次第です。また同時に、熊薬同窓会会員の一人としてこのような熊薬の飛躍的な充実・発展を誇らしく思うものであります。

熊薬同窓会としましては、このような熊薬の教育・研究の発展に対して少しでも寄与できればとの同窓会役員会の総意により、平

目次

熊薬の教育・研究の更なる充実・発展を期待して	1	薬学展開催のお知らせ	12
久野拓造先生を悼む	2	熊薬、昔は今(17)-2	13
第75回日本薬理学会年会報告	3	学内だより	15
市民公開講座「くすり」を知る - より健やかな健康のために	3	博士号取得者	16
支部だより	4	慶事	16
鹿兒島支部		庶務報告	16
福岡支部(蘇陵会)		訃報	16
岡山支部		平成13年度卒業(修了)者就職(進学先一覧)	17
楠熊会		寄付者一覧	17
関東支部(東京バッテン会)		1-10千人会入会者一覧	18
宮崎支部		1-10千人会寄付者芳名録	20
卒業生だより	8	熊薬研究助成会規則・細則	21
熊薬、昔は今(17)-1	9	熊薬研究助成支援の会 1-10千人会について	22
平成14年度「薬剤師のための医療薬科学研修会」のお知らせ	12	同窓会からのお願い	22
平成14年度熊薬同窓会総会のご案内	12	編集後記	22
		連絡先	22

熊薬研究助成支援の会 「1 10千人会」について

熊薬研究助成会 運営委員会
委員長 田代 昭



同窓生の皆さん、最近我が母校熊本大学薬学部を訪れたことがありますか？

母校熊薬は、樹齢百年をゆうに越える楠や銀杏などの大木が若かりし学生時代の風情を今も残し、ここ数年の研究施設の新設および大型改修工事の竣工により、日本一美しい学園に生まれ変わりました。こうして21世紀に向けて大きく発展していくため、更なる研究設備の充実・研究環境の整備が計られてい

ますが、慢性的な研究費の不足が母校発展のブレーキになっているそうです。このような状況に接し、私ども同窓生が母校発展のため少しでもお役にたてようと、熊薬研究助成支援の会「1-10千人会」(ワンテン センニンカイと呼びます)を設立いたしました。

その主旨にご賛同いただき、是非とも同窓生の皆さんの多くにご入会いただきたくお願い申し上げます。

詳細につきましては、同窓会事務局までお問い合わせ下さい。

ワン テン
1 10 千人会

あなたの足跡を母校に残しませんか!
同窓生一人一人の団結が力です!
あなたの善意を母校に刻みましょう!
母校の発展はあなたの発展!

熊薬同窓会からのお願い

今回、1 10千人会の完納者の皆様にも、失礼ながら振込用紙を同封させて頂きました。勝手に恐縮ながら、再度の温かいお志を祈念申し上げます。

本会報の発行を含め熊薬同窓会の活動にかかる費用は、会員の皆様方の会費および寄付金よりまかなわれております。諸経費の値上がりや会員数の増大(本会報は会員全員に郵送されております)に伴い、予算が余裕のないものになりつつあります。現在、会費納入率は全会員数の約3割です。何卒、年2,000円の会費の納入による御協力をお願いいたします。また、本会報には今年度の会費用と1 10千人会用の2種類の振込用紙が同封されております。振込口座が異なりますので、お間違いのないようお願いいたします。なお、行き違いにご送金された方は何卒ご容赦下さい。

本会報は会員名簿記載の住所に郵送されております。お手もとに送られてこない方を御存知でしたら、同窓会事務局への住所変更の連絡を勧めていただくと幸いです。

編集後記

熊本はすっかり真夏を思わせるように暑い日々が続くようになってまいりましたが、全国各地の熊薬同窓会会員の皆様はいかがお過ごしでしょうか。

何とか、ここに第38回同窓会会報の発行の運びとなりました。今回、原稿を依頼したところ、非常に多くの卒業生方々よりの原稿を頂きました。同窓会に対する関心の高さが伺え、熊薬・同窓生の「絆」に心強さを感じました。

ご多忙にも関わらず執筆いただいた諸先生方、快く原稿依頼をお引き受けいただいた卒業生諸氏に御礼申し上げます。今回の会報編集で、同窓会の関係諸氏に大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

最後に、同窓会会員の皆様の益々のご健康とご発展をお祈り申し上げます。

追記;平成13年度熊薬研究助成金受領者研究報告については次号に掲載致します。

(編集委員 O)

連絡先



熊薬同窓会のホームページアドレスは下記になります。熊薬ホームページ共々、どうぞ御覧下さい。

〒862 0973 熊本市大江本町 5 1
熊本大学薬学部内
熊本大学薬学部同窓会事務局
TEL & FAX 096 371 4766(直通)

《熊薬同窓会ホームページ》
<http://dousou.pharm.kumamoto-u.ac.jp>
《E mail》 kumayaku@www.pharm.kumamoto-u.ac.jp
《熊薬ホームページ》 <http://www.pharm.kumamoto-u.ac.jp/>

成7年に熊薬研究助成会を設立しました。この会の目的は本学薬学部の若手研究者または熊薬卒業生で大学等研究機関に所属する若手研究者の基礎的または学術的研究の助成および海外留学など国際学術交流に対する援助であります。すでに多くの会員の皆様にはこの主旨をよくご理解いただき、熊薬研究助成支援の会(1-10千人会)にご入会いただいております。お陰様で平成14年度には、当初の目標でありました千人を突破いたしました。また、完納者も400名になるうとしています。ご協力いただいております会員の皆様に厚くお礼申し上げます。平成8年より研究助成を開始し、すでに本年度助成を含めて24名になり、熊薬研究助成会の機能が順調に展開できております。

国立大学が大きく変わろうとしているとき、我が熊薬が素晴らしい教育・研究体制の中で、学術研究において国内はもとより国際

久野 拓造先生を悼む

熊本大学薬学部名誉教授 久野拓造先生は平成14年3月20日午後7時逝去された。久野先生は、昭和28年3月九州大学医学部薬学科を卒業、九州大学大学院修士課程を修了後、九州大学医学部付属病院助手、九州大学医学部助手を経て、久光製薬株式会社に入社し、抗炎症剤、筋弛緩剤等の研究に携わり、エアゾール製剤(エア・サロンパス)を開発し、製品化された。昭和43年3月同社退社後、直ちに熊本大学薬学部薬品製造工学助教授に就任し、4月に教授に昇任された。以来、薬学領域における薬品製造工学、創薬技術の基礎作りとその発展に貢献し、平成6年3月停年により退職された。

先生は、上記の経歴のとおり、情熱をもって学術の研鑽と後進の育成に専念され、この間、硫黄の特性を利用した合成化学的研究を展開し、有機硫黄化合物の利用と生理活性物質の合成となってさらに発展した。この間指導を受けた弟子の中には創薬研究の第一人者を生み出している。

これらの医薬品合成反応探索の過程で見いだしたピリジンN-オキシド類と親双極子類との1,3-双極性環化付加反応および付加体の転位機構の解明は、フロンティア軌道理論の実験的証明の一部となっている。周辺環状反応を用いた合成設計は、種々の連続周辺環状反応へと発展し、医薬品、農薬の基礎分野の研究に貢献した。さらには、化学・薬学領域に大型コンピュータを積極的に導入し、合成化学における計算機利用の先駆的役割を果たされた。

その間、文部省在外研究員としてアメリカ、ドイツ、オーストラリアを訪問され、研究教育の研鑽を積み、以後の後進の指導に取り入れられた。

教育面においては、合成化学、有機化学、化学工学、薬学概論等の科目を担当され、基礎の重要性およびその応用と実践を説くなど、その懇切丁寧な講義で学生から

慕われ、昼夜をとわず学生が訪れ、多くの学生、門下生に深い感銘を与え、学問に寄せる情熱と責任感是他の範とするところであった。実践重視の立場から、昭和59年、薬学専門教育(3年次薬品製造工学実習)において、パーソナルコンピュータを利用したプログラミング実習を導入するなど、薬学部情報処理教育の基礎を築かれた。さらに、薬剤師のための医薬品情報処理研修会(卒後教育)も熱心に推進するなど薬学部の活性化に尽くされた。先生の優れた指導力は、大学院博士課程が設置され、さらに価値あるものとなった。

大学の管理面においては、新任早々の昭和44年から49年まで学生部委員、この間の49年には学生部長をつとめ、学生の良き相談相手であった。昭和46年から48年まで学生部委員会広報委員を務め、大学紛争の終止に力を尽くされた。昭和50年から52年、及び54年から58年は評議員、その間、昭和55年12月から昭和60年3月まで評議会臨時特別部会委員長(生協裁判担当)をつとめ、長年の課題であった生協裁判の解決(昭和55年から昭和60年10月)に尽力された。昭和58年8月から62年7月まで4年間二期にわたり薬学部長を務め、その間、昭和60年の熊薬100周年記念事業を大成功させ、その折は先生の研究の指導原理となった福井博士の講演会が行われた。また、薬学部の長年の夢であった博士後期課程を、昭和61年に設置し、薬学部の教育研究の充実を推進された。

この在職中の功績により、平成6年4月28日には熊本大学名誉教授の称号を授与された。

一方、学会活動においては、日本薬学会九州支部長、運営計画委員等を歴任し、昭和56年の熊本での日本薬学会第101年

的に評価を得るような活動をしてもらえれば、さらに熊薬の存在価値は高まっていくと思います。そのためにもこの熊薬研究助成会がその一助となり、今後もさらに維持・発展していかなければと考える次第です。当初目標の千人の会に到達しましたが、より磐石な体制を築くためにも、まだ未入会の方のご入会およびすでに入会の方の毎年のご入金をよろしく願ひいたします。毎年3月に開催します役員会の日に、完納者の方に熊薬に来ていただき熊薬研究助成会会長(学部長)から感謝状を贈呈していただいております。

我が熊薬が21世紀に大きく飛躍することを祈念しつつ、同窓会会員の皆様に物心両面のご支援・ご協力をいただいておりますことにあらためて御礼申し上げます。(2002.4.24記)

会の開催にあつたては運営の中心となるなど、日本の薬学領域の発展に貢献された。学部長引退後は、文筆活動に専念され、日本談義、熊本日々新聞などに50編以上執筆された。在職中に病気に倒れ、実質的に絶筆となった「和解」は生協裁判の実録(松角学長に依頼されて執筆、未公開)であり、400字詰原稿用紙914枚に及ぶ大作である。

以上のように、先生は、永年にわたり、学研の徒として研究に鋭意努力し、業績をあげるとともに、教育行政にもその重責を果たし、国内外の学術界、教育界の発展に寄与された。これらの功績により、正四位に叙され、勲三等瑞宝章(平成14年3月20日付)が授与された。

久野先生のご冥福をお祈りするとともに、その志を継ぎ熊薬をさらに発展させることを誓って追悼の辞としたい。

創薬基盤分子設計学講座
(旧薬品製造工学研究室)

[資料]

官報5月1日
叙勲 正四位勲三等瑞宝章(平成14年3月20日付)

第75回日本薬理学会年会報告

会長 宮田 健(熊本大学薬学部薬理学研究室教授)

第75回日本薬理学会年会を平成14年3月13～15日の3日間にわたって熊本県立劇場と熊本学園大学を主会場として開催しました。日本薬理学会は日本医学会の分科会の一つで、会員約6500名で構成されています。薬理学は「創薬と薬物療法の確立」を主な目的としていますが、生命科学と密接不可分の関係にあり、また、臨床医学・臨床薬学と直結しているため広範な領域に及びます。このことから、本学術集会への参加者は、日本全国の医・歯・薬・看護・農・獣医学部等の薬理及び関連講座、病院薬剤部並びに公的研究・行政機関や製薬企業の研究所等に所属する研究者を主にして、欧米、アジア各国からの招待講演者・参加者を含め例年2500人以上に達します。熊本での薬理学会の開催は昭和48年熊本大学医学部第一薬理學田中正三教授が主催された第46回年会以来で、実に29年ぶりのことです。今回は薬理学会主催、文部科学省後援による県民公開講座(実行委員長:高濱和夫熊本大学薬学部衛生化学教授)も併せて開催されたため、熊本の医療界のみならず熊本県民にとっても大変意義深いことだったと考えられます。

本年会のテーマは、薬理学の更なる発展を願って「近未来における薬理学開拓-基盤研究から薬物治療の確立まで」とし、このテーマに沿って特別講演、シンポジウム、ワークショップなどの企画を用意しました。

特別講演では創薬基盤としてのレセプター・シグナル伝達系とその相互作用(クロストーク)に関して、A.S.Verkmán教授(カリ

フォルニア大)に「Aquaporin water channels as target for drug discovery」, T.R.Soderling教授(オレゴン健康科学大)に「Roles of calmodulin-dependent protein kinases in neuronal development and plasticity」, 御子柴克彦教授(東京大)に「IP3 レセプター/Ca²⁺シグナルとその細胞機能」, 宮本英七教授(熊本大)に「カルシウムシグナリングに関する研究 - CaMキナーゼカスケードを中心に -」, 貝淵弘三教授(名古屋大)に「Rhoファミリーによる細胞骨格と接着の制御」と題してご講演いただき、臨床とリンクした分子レベルでの薬効解析に関して、満屋裕明教授(熊本大)に「AIDSの化学療法:その進歩と課題」, 岡部進教授(京都薬大)に「胃酸分泌および胃粘膜の恒常性の制御機構について - 各種遺伝子欠損マウスでの解析 -」, 蘆田伸一郎博士(第一製薬)に「抗血栓薬の開発:現状と将来」, さらにゲノム情報に基づく薬物治療の観点から石崎高志教授(熊本大・院)に「臨床薬理遺伝学とテイラーメイド(tailor-made)治療への提言」と題して講演していただきました。

シンポジウムは「薬理ゲノミクスからゲノム創薬/医療への展開」, 「神経幹細胞制御の分子基盤」など先端的な新知見の発表に加え、臨床からの強い要請がありながら国内では未開拓領域に留まっている気道分泌の薬理に関して、「Mucoactive Drug Research-Future Prospects」をinternational symposiumとしてとりあげました。他のシンポジウムも含め外国人スピーカーが多いことが本年会の特徴の一つです。「新医薬品承

認申請において必要とされる薬理学の役割」, 「治験と薬理学-日本における治験推進の為の薬理学教育とは-」など教育企画的なものまで網羅した総数41題の充実したプログラムになりました。

一般演題は892題でポスター発表にしましたが、新しい試みとして、その中からトピック性の高い「グリア細胞の機能」, 「アポトーシスの発現と制御」, 「チャネル研究アップデート」, 「神経疾患と行動薬理学」, 「細胞内情報伝達機構と転写調節」, 「平滑筋臓器構築の制御」の各分野ごとに6-10題選り、ワークショップ形式で口頭でも発表していただくことにしました。また、若手研究者による発表の中から22題を選び、優秀発表賞を授与しました。

以上のように本年会はかなり盛りだくさんの内容になりましたが、2800名を超える多数の皆様にご参加頂き、究極の目的を見据えた薬理学・薬理学会の幅広い活性化とグローバルイゼーションを志向する討論の場として有意義なものになったと考えています。

本年会の企画、準備、運営にあたって、熊本大学薬学部、医学部、他大学の先生方、各種団体、企業に多くのご援助とご協力を頂き、特に熊本大学薬学部同窓会には物心両面から多大なご支援を賜りましたことを深く感謝申し上げます。誠に有難うございました。

市民公開講座「くすり」を知る より健やかな生活のために

熊本大学薬学部 高濱和夫

雨模様の天気は晴れて、春風肌心地よい公開講座向けの日和であった。(社)日本薬理学会主催の市民公開講座は平成14年3月16日(土)午後、熊本市の県立劇場演劇ホールで開催された。前日までの第75回日本薬理学会年会(宮田健会長)を受けての開催である。昨今、薬の使い方を含めた健康や疾病に関する公開講座は結構多い。ここは原点に還って「くすりを知る」ことが肝要であろうと考えた。趣旨を要約すると、以下のようなものである。21世紀には薬(化学物質)はより深く人々の生活の中に入り込み、市民が薬(化学物質)についてこれまで以上に「正しく知る」ことはより健やかな生活や社会のためにきわめて重要であろう。また、21世紀における薬やその在り

方について人間として共通の理解や認識をもつことはきわめて重要と思われる、ためである。

具体的なプログラムは以下のとおりである。

第一講「薬とは何だろう - 夢の薬はできるか」

長尾 拓 氏(国立医薬品食品衛生研究所 副所長)

第二講「薬を上手につかう - 薬で病気はどこまで治るか」

澤田康文 氏(九大大学院 教授)

第三講「薬と生命 - その現在、未来」

瀬名秀明 氏(作家)

はじめに、橋本敬太郎広報委員長(当時)から開会の辞があり、日々進歩する薬の情

報について市民に啓蒙活動することは、日本薬理学会の重要な使命の一つであることなどが述べられた。続いて、75回年会の宮田健会長から参加者に対するお礼を含めた挨拶があり、講座に入った。

第一講において、長尾氏は、「クスリ(薬)は逆に読むとリスクである」という話から始まって、くすりの由来、作用の原理や副作用の問題、今話題の薬、どこまで理想的な薬ができるのか、などなどについて、自ら開発されたカルシウム拮抗薬の例なども示しながら、また、興味深いエピソードを交えつつ、わかりやすく講演された。

第二講で、澤田氏は、まず、薬の吸収、分布、代謝、排泄の基礎についてわかりや